

ドイツの選ぶ道に 同じ敗戦国の日本は 敏感であるべきだ

在仏コラムニスト 安部 雅延



同じ轍を踏んだ日独の運命

ドイツで電車に乗るとドイツ人の乗客に恐ろしいほどの類似性を感じる。世界を飛び回り、人間を撮って右に出る者はいないといわれた写真家の故大神達夫氏は私に同じことを言った。無論、体格も顔だちも違い、一方は宗教革命を起こし、ドイツ哲学を生んだ国だが、日本は多神教で観念的思考に弱いという違いもある。

にも拘わらず、その勤勉さ、ギルドに象徴される職人文化、融通が利かず頑固なところ、ルールが大好きで、加えて地味なところも似ている。南欧にも北欧にも見られない共通項が多い。

この2つの経済優等生国は地理的に非常に扱いの難しいロシアを挟んで東と西に存在する。第2次世界大戦時に日独伊3国同盟の推進役を務めた大島浩駐独日本大使(当時)は陸軍大臣だった父の代からドイツに入れ込み、彼は一貫してヒトラー心酔者だった。大島もなくして日独伊3国同盟はなかったともいわれる人物だった。

親和性のある日独はファシズムに走り、日本はアメリカを敵として敗れ、天皇は神から象徴的存在に引き下げら

れ、ドイツは連合軍とソ連軍の挟み撃ちでヒトラーは自害し、ナチスドイツは滅んだ。両国ともに国連創設で敵国と定義つけられ、2度と他国に戦争を仕掛けないための「封じ込め政策」が連合軍によって取られた。

戦後の70年以上を自国防衛以外の武力はもたず、他国への戦争参加、殺傷能力のある武器の海外輸出は禁じられ、代わりに連合軍が両国に駐屯し、監視を続けた。その間の冷戦期に国防に費やすエネルギーを経済に集中させ、両国ともにアメリカに次ぐ経済大国に成長した。

これらの共通項がある中、ドイツはロシアの西側、中央ヨーロッパに位置し、日本はロシアの東側の極東アジアに位置し、異なる点といえば、ドイツは周辺国にフランスなど先進国でキリスト教の価値観を共有する国がほとんどなのに対して、日本の周辺には先進国はなく、精神文化の共通性も少なく孤立していることだ。

戦後、日本は敗戦国としてアメリカにだけ向くように方向づけられてきた。せいぜい英国と接近しても、悪しき旧同盟国ドイツと接近することは憚られた。70年経ってもドイツとの関係

はぎこちなく、ビジネス以外での接近は何となく後ろめたい。

つまり、ドイツに対する無関心は今でも続いている。両国は軍事行動から遠ざかったおかげで平和が続き、民主主義を成熟させ、高度な文明社会を構築した側面もある。今は円安で大挙して欧米人旅行者が日本を訪れているが、日本人が知らないだけで大半の旅行者は文明の成熟度(安全や安心)に感銘を受けている。

今、フランスでは未成年者の暴動が起きているが、日本を何度か旅行したあるフランス人は「フランスは日本と違い、途上国に成り下がっている」と私にいった。

ウクライナ紛争が勃発したヨーロッパの認識は、北大西洋条約機構(NATO)のストルテンベルグ事務総長が昨年2月に指摘したように、ウクライナ紛争勃発で世界は東西冷戦終結後、初めてとなる世界の枠組みが根底から変更される事態に直面していることだ。権威主義国家と自由主義国家の新たな本格的対立の始まりだった。

それを如実に表し、直撃されたのがドイツだった。敗戦国で封じ込められ、ぬくぬくと平和を享受し、一切の国際

紛争を遠くから眺めることは許されなくなつた。最初はウクライナにヘルメット5000個を渡してお茶を濁そうとしたが、ウクライナだけでなく周辺国からも白い目で見られ、国内からも批判の声が上がつた。

戦後レジュームから

脱却したドイツ

ドイツは戦後レジュームからの完全な脱却を自分の意思ではなく、環境激変の中で迫られた。首相になって間もない平和主義者の社民党出身のシヨルツ首相はパニックに陥つた。結果、安全保障ではウクライナへの重火器兵器

提供、リトアニアへの数千人単位の独軍兵士配備、国防費の大規模な増額の方針を打ち出した。

ウクライナの戦場は世界史に残る第2次世界大戦の激戦地で、多くドイツ兵が命を落とした地だった。ウクライナを見殺しにして、その後の中央ヨーロッパで信頼を得る道はないはずだ。すでに大半の旧中東欧諸国の国々は欧州連合（EU）に加盟し、北大西洋条約機構（NATO）の加盟国だ。

ヨーロッパ大陸で最も裕福な国ドイツが、最低限のウクライナ支援でお茶を濁すわけにはいかない。敗戦後、維持してきた国防自衛政策の大転換は避けられない。皮肉にもドイツの平和主義の中心にいた社民党・緑の党連立内閣が選ぶしかなかった大転換だ。リトアニアへの本格的な大規模な駐屯も戦後初めてのことだ。

確かにドイツと日本の戦後歩いてきた道は異なる。ドイツは日本ほど、忠実な米国の追随者ではなかつたし、理念やイデオロギーへのこだわりは日本は足元にも及ばない。

1990年代のドイツで取

材した政財界のトップたちは「イデオロギー闘争に慣れていたドイツ人には経済への意識転換は大変だった」と皆口を揃えて言っていた。

米国の顔色だけを窺って戦後を過ごしてきた日本と大きな違いがある。ドイツは戦後、米国の眼鏡をかけて世界を見てきたわけではない。戦後70年間以上周辺国から賠償を求められ、脅されてきた日本とドイツは大きく異なる。ヨーロッパには謝罪を強制する文化はなく、キリスト教圏には敵を許すという価値観があるからだ。

それはともかく、ドイツは今や世界一とも言える経済、産業基盤を構築し、それは強靱だ。ギルドの伝統的職人文化は経済で、あらゆる産業を下支えしている。アメリカほど金を欲しがらず、過度な贅沢を追求せず、儉約と勤勉が息づいている。

重厚長大産業からハイテク産業、金融まで経済基盤は盤石で、ギリシヤ財政危機によるユーロ不安の時も、2015年に100万人に上るシリア難民を受け入れてもビクともしなかつた。

地方自治が徹底しており、州政府の権限が強く、フランスのような中央集

権でマクロン氏のような独裁者もない。ヨーロッパの最優等生というだけでなく、世界で最も成熟した民主主義国家だ。そのドイツは敗戦後、ナチズムの亡霊から脱却し、ドイツなくして欧州連合（EU）はありえない。

ドイツの存在感は増す一方で、国際的発言権も増している。それを見て愉快には思えないフランスのマクロン氏は独自外交で得点を上げたところだが、社会的基盤がぜい弱で説得力がない。移民問題もドイツよりフランスは深刻だ。

日本が今、最も注目すべきは米国ではなく、ドイツの生き方だろう。無容諷ドイツの頑固で独善的で傲慢な態度は中央ヨーロッパ独特の文化だが、逆に米国追従ではなく信念を持つ態度は学ばべきだろう。

ドイツは第2次大戦後の東方政策でロシアとの経済依存度を強め、中国との関係もヨーロッパでは真っ先に築いた。ウクライナ紛争で東方政策の間違いを痛いほど感じているドイツは大きな岐路に立たされているが、ウクライナ紛争を受けてのドイツの選択と行動は、大いに日本が注目すべきと考えている。

